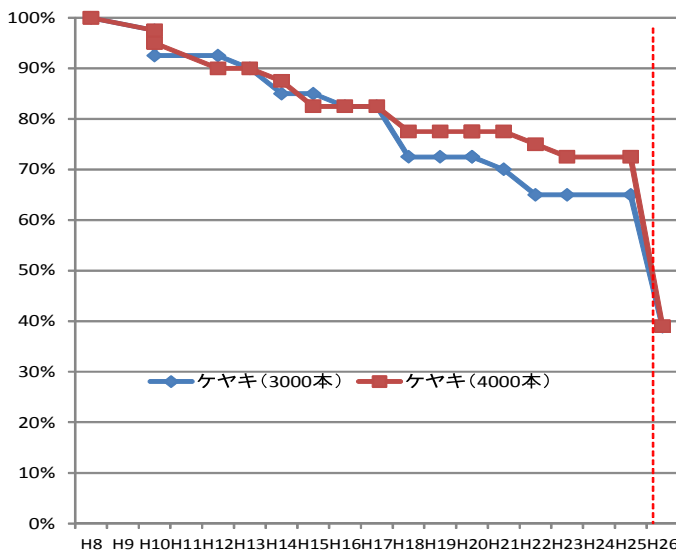


樹種名	ケヤキ		
科 目	ニレ科		
学 名	<i>Zelkova serrata</i>		
分 布	本州、四国、九州、国外では朝鮮半島、中国及び台湾に自生している。		
樹木特性	陽樹であるが、幼齢期は比較的耐陰性が高いが老齢期が進むに従って十分な日照が必要とされる。山地帯下部の溪谷沿いの斜面に生育することが多い。また関東ローム層の平地では特に成長が早い。	  	
用 途	重要な建築材で桃山～江戸時代の社寺の建築に多く用いられた。器具・家具・船舶・彫刻・薪炭材として利用。		
植栽本数/面積 (植栽密度)	638 本／0.21ha (3,000 本／ha)		
特 徴	【樹 形】 落葉高木であり、高さは 20~30m の大木になる。 葉の鋸歯は曲線的に葉先に向かう特徴的な形であり、鋸歯の先端は尖る。雌雄同株で雌雄異花であり、花は 4 月から 5 月頃、葉が出る前に開花する。 ケヤキは谷沿い、凹地等で石礫を含んだ崩積土あるいは石灰質の土地が最適地である。BD~BE 型土壌。天然生ケヤキがあるから適地とは限らない。土壌が深く、通気性、透水性の良好な適潤肥沃地で、主として中腹以下の緩傾斜地を植栽適地とする。土地に対する要求度が高い（肥沃で石礫を含む排水の良い土地）ため。 材は堅牢緻密で木目が美しく、重硬で狂いがなく、湿気にもよく耐え、保存性が高いことから、重要な建築・器具材で特に社寺の建築に多く用いられる。		
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後 2 年を経過した頃からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。植栽から 18 年が経過した現在の平均樹高は 10m を超える程度まで成長しているが、個体の優劣がはっきりしている。穿孔被害は多かったものの、枯死まではいたらない個体も多い。枝打ち試験を実施した。さらに、劣勢木を間引きし平成 16 年度に他の場所に移植した。		
被 害	野兎・鹿の被害は特に無かった。 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害を受けた。(延べ駆除本数：215 本)		

ケヤキ 現存率



【現存率】

植栽後 3000 本/ha と 4000 本/ha とともにコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生している。

林内の照度調整を図るため平成 21 年、22 年、23 年、24 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 38.9%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

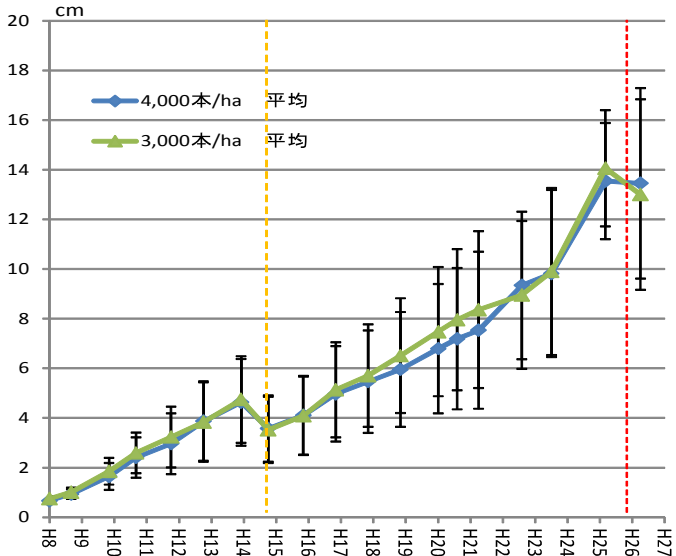
3,000 本/ha と 4,000 本/ha とともに良好に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均胸高直径は 13.00 cmであり、4,000 本/ha の平均胸高直径は 13.45 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ケヤキ 根元・胸高直径



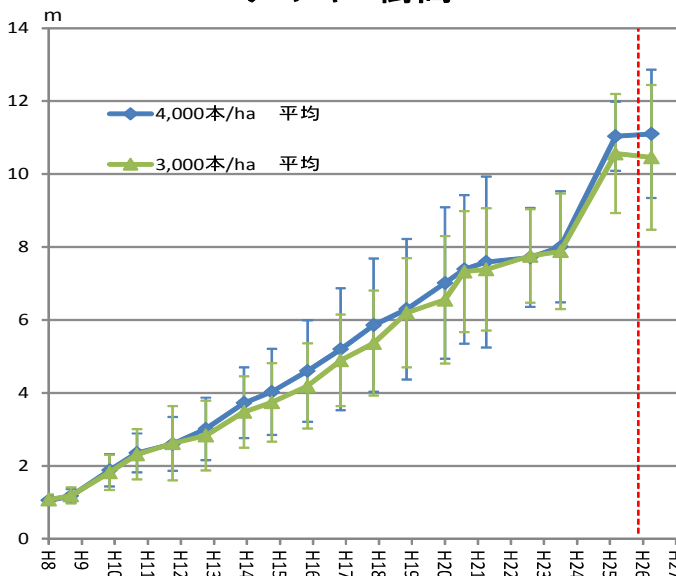
【樹 高】

3,000 本/ha と 4,000 本/ha とともに順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均樹高は 10.46m であり、4,000 本/ha の平均樹高は 11.10m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ケヤキ 樹高



《プチ情報》

ケヤキの材は音響上の特性を利用して、太鼓、三味線、琵琶などの胴に使用される。戦前は軍用として利用が多く、軍政府が植栽を奨励したため、造林実績も多い。